

# 佐竹義厚の少将昇進

# 古文書倶楽部

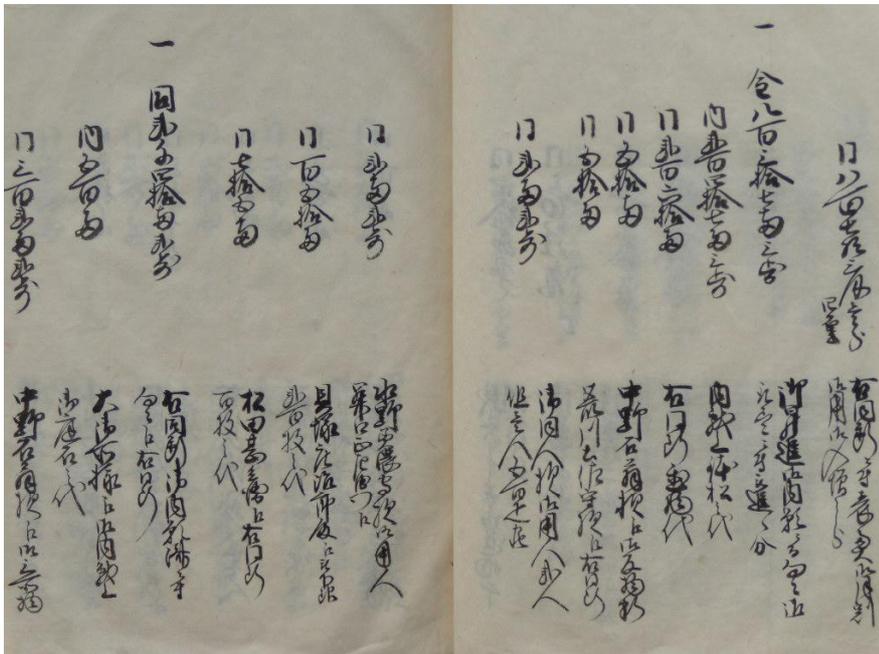
【発行】  
秋田県公文書館  
2009.3  
第27号

今月のおすすぬ資料

天保九戌戌年十二月

義厚公少将御昇進二付惣御入方取纏目録

(資料番号 AH317 64)



日本銀行金融研究所貨幣博物館によると、米価に換算すると江戸時代の1両は、現在の4万円に相当するとのこと。

幕末秋田藩の家老『宇都宮孟綱日記』第四巻、三月十六日に刊行。第四巻は嘉永六年(一八五三)一月から安政二年(一八五五)六月まで。秋田活版印刷株式会社(電話018 888 3500)にて5000円で頒布。

江戸時代の大名は「佐竹右京大夫」というように、官職名が与えられました。また官職名の他に「従四位下」というような位階も与えられました。江戸時代の大名の官職名と位階は、幕府が朝廷に申請し天皇が授与しました。要は天皇を頂点とした序列社会を作ったわけですが、その序列を決めるのは將軍で、ここに幕府が大きな権力を持ち続けた鍵があります。

佐竹家の場合、初代藩主義宣が中将、二代義隆・三代義処・五代義峯が少将に任じられますが、江戸時代中期以降はおおむね右京大夫どまりでした。しかし十代藩主佐竹義厚(文化九年〜弘化三年)は、文政七年(一八二四)十三歳の時に従四位下侍従右京大夫に叙任しましたが、天保七年(一八三六)に幕府へ少将任官の内願を提出し昇進の運動を開始します。

「義厚公少将御昇進二付惣御入方取纏目録」を見ると、秋田藩は藩主の昇進運動に4841両余の金を使ったことが分かります。更に内訳まで書いてあるから面白い。

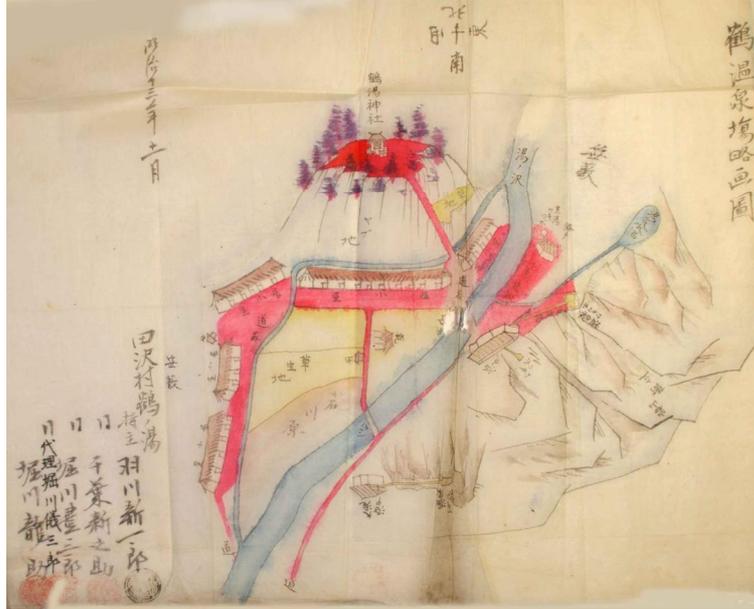
写真の右の頁を見てください。「金837両3歩 御昇進御内願二て向々御取纏二付被進候分」とあります。これは昇進の事前運動に使った金額。最初の247両3歩は松の代金。そして260両がその鉢代。つまり合計500両の盆栽代。恐らくこれは十一代將軍で、この時期大御所として権勢を振るった徳川家斉に贈られたものでしょう。次に家斉の側近、中野石翁に反物代として50両。次にまた幕府要人に50両といった具合。

写真の左の頁には「同2040両2歩 右同断御内願済二付向々え右同断」とあります。これは少将昇進決定後の謝礼の金額。最初の500両は徳川家斉へ献上した庭石代。次が中野石翁へ三所物(刀の目貫・笄・小柄)代として302両2歩といった具合。

このように大名の昇進には莫大な金がかかったことが分かります。それにしても、名目であるとは言え、500両の盆栽や庭石ってどんなものなのでしょうね。

(畑中康博)

- 1 温度 白湯六十一度 黒湯五十五度
  - 2 源泉 白湯、気泡あり。湯ノ花多し。
  - 3 発見 黒湯、気泡なし。少し硫気あり。
- 不詳。ただし元和初年(一六一五頃)には存在が知られている。万治二年(一六五九)藩主佐竹義隆が入湯。



明治十四年の温泉調査 第二回  
鶴ノ湯温泉(現・仙北市田沢湖田沢字先達沢)

『古文書倶楽部』第26号で取り上げた「衛生課司薬掛事務簿」に記載のある明治十四年の温泉を紹介します。

4 効能 白湯、疥癬(ダニによる皮膚病)・瘡(できもの)・痰・打撲・頭痛・手足の疼痛。 黒湯、腹痛・溜飲・疝気

・淋病・虚弱

温泉の効能は「明治十四年段階で効き目がある」とされたものですので、**くれぐれも御注意ください。**

(畑中康博)

古文書こぼれ話

秋田藩の大名飛脚について

幕末の秋田藩家老の日記である『宇都宮孟綱日記』には大名飛脚の記事が各所に見られます。

秋田藩の場合、江戸と久保田の間で書状を運んだ飛脚には、御小人と呼ばれる下級藩士が就きました。定例の飛脚は、毎年正月二日の出発に始まり、十二月二十日過ぎの出発便で終わります。その間毎月二回以上送られました。通常は一人で飛脚の任務に就きます(「一人飛脚」)。

飛脚をたてる日は家老が決め、決定すると久保田城中や江戸藩邸の各部局(「局」)にその旨を伝えます(「脇触」)。脇触を受けた各局では、飛脚に持って行って欲しい書状を作成し飛脚に託します。飛脚が出発する日は江戸・久保田共に各局では通常業務を停止し、飛脚に託す書状の作成に集中しました。そのため飛脚の出発は午後八時〜十二時頃になることもありました。

藩主の病気や火災といった緊急に知らせなければならぬ事態が発生した場合には、各局に

脇触をせず(「無脇触」)、臨時に飛脚をたてます。こうした臨時便の飛脚は三人で任務に就きます(「三人飛脚」)。

江戸〜久保田間の飛脚の所要日数は、季節・天候等により七日〜十七日になりました。

一度決定した飛脚の到着日時の厳守は言うまでもなく、『宇都宮孟綱日記』安政二年八月二十二日条には、烈しい雨に五時間程出発時間を遅らせて欲しいと願った飛脚に、宇都宮は直ちに出發するよう指示する記事があります。

飛脚が藩主の参勤交代の行列に出会った場合にはどうしたか?実は次の作法がありました。

行列が宿場の本陣に滞在している場合。

この場合、飛脚が運んでいた藩主あての書状を行列奉行に渡します。藩主は自分あての書状を見て新たに指示を出す必要があれば、そこで書状をしたため飛脚に託します。飛脚は新たに渡された書状や出発時に各局から託された書状を持って目的地へ向かいます。

街道を移動する参勤の行列に出会った場合は、この場合、藩主あての書状を行列奉行に渡すのは同じですが、飛脚は行列と共に次の宿場まで行かなければなりません。飛脚はそこで新たな書状を受け取り、目的地へ向かいました。先行する行列に後から飛脚が追いついた場合には問題ありませんが、行列は江戸行き・飛脚は久保田行きというように行き先が反対方向の場合には、飛脚は自分が来た道に戻る形で行列が滞在する宿場へ行かなければなりません。

(越中正一)